

平成 25 年度調査報告書
「経済連携協定外国人介護福祉士における国家試験合格後の問題」
そのⅠ：国家試験合格者受け入れ施設の課題

目次

I 調査の概要

1. 調査の目的
2. 調査の対象
3. 調査の時期及び方法
4. 回答の状況
 - 回答総数
 - 回答率

II 調査の結果

1. 受け入れ施設での国家試験合格までの教育支援
 - 1) 日本語教育支援
 - 2) 専門学習支援
2. 国家試験合格後の状況
 - 1) 外国人介護福祉士の業務評価
 - 2) 外国人介護福祉士の日本語能力
 - 3) 外国人介護福祉士について（長所、短所、リスク管理上の問題）
 - 4) 外国人介護福祉士と異文化
 - 5) 国家試験合格後に必要な支援
 - 6) その他、コメント

III 調査総評

平成 26 年 6 月 25 日
NPO 法人外国人看護師・介護福祉士教育支援組織
調査責任者 青野淳子
報告書作成者 青野淳子、樋口聰美

I 調査の概要

1. 調査の目的

経済連携協定（EPA）で来日した介護福祉士候補者のうち国家試験合格者（以下外国人介護福祉士という）について、受け入れ施設の側から合格後の課題を検討する。

2. 調査の対象

第24回及び第25回介護福祉士国家試験合格者受け入れ施設合計103施設であるが、電話調査により外国人介護福祉士の在籍状況を調査した。その結果帰国または国内の他の施設に転職したために合格者が不在（ゼロ）となったことが把握された施設が19施設あった。電話調査で合格者の在籍情報を明らかにしない施設もあったので、正確な調査対象施設数を把握することはできなかった。その結果、合格者受け入れ施設総数103施設より19施設を除く84施設を調査対象施設と仮定し、調査票を郵送した。

3. 調査の時期および方法

平成25年10月～11月

平成25年10月初旬に調査対象施設へ郵便にて調査票を送付し、郵送にて回答（無記名）を受領した。

4. 回答の状況

16施設（19.0%）より回答を得たが、うち1施設では合格者が他の施設へ転職したとの回答があり、実質回答数は15施設であった。

表1 回答施設数及び回答合格者数

	施設数
回答施設数	16（実質回答数15）
回答率	19.0%（16/84）

表2 回答施設における調査対象者の合格年度と人数

	施設数	調査対象者数	インドネシア人	フィリピン人
2012年（24回）合格者	1	1名	1名 （男0、女1）	0名
2013年（25回）合格者	14	21名	8名 （男0、女8）	13名 （女10、男3）
合計	15	22名	9名	13名

本研究は当法人倫理委員会の承認を得ております（承認番号：承2013002）。

II 調査の結果

1. 受け入れ施設での国家試験合格までの教育支援

1) 日本語学習支援

担当者：15 施設のうち、6 施設では専門日本語講師、8 施設では施設職員、記載なし、1 施設。

日本語講師が担当した 6 施設のうち 4 施設では施設職員も担当した。

時間：毎日約 2 時間、週 2～3 回、1 回約 2～5 時間であった。1 施設では、特に指導時間を設けず、現場での日常会話をとおして指導した。

内容：厚生事業団配布の教材を使用している施設が多かった。

2) 専門学習支援

担当者：介護福祉士を含む施設職員が担当した施設がほとんどであった。日本語講師が担当した施設もあった（2 施設）。記載なし（3 施設）。

時間：毎日または週 2～3 回、1 回数時間、専門学校に通学させた施設もあった。

内容：過去問題集や厚生事業団配布のテキストを使用しての学習など。

2. 国家試験合格後の状況

1) 外国人介護福祉士の業務評価

[方法]

外国人介護福祉士の業務のうち 10 種類について、外国人介護福祉士の業務成績を評価した。評価方法として、外国人介護福祉士が日本の国家試験に合格し介護福祉士として入職したと同時期に新人介護福祉士として入職した日本人介護福祉士の平均的能力に比較し、日本人と「同程度にできる」場合を 1 とし、「やや不足」を 2、「不足」を 3、同程度よりも「優れている」場合を S と評価した。

[結果]

外国人介護福祉士の業務成績を図 1 に示した。

- ① 6 種類の業務（安楽体位、食事援助、排泄援助、整容援助、入浴援助、移乗・移動援助）において、22 名全員が日本人と「同程度にできる（1）」または「優れている（S）」との評価を得た。
- ② 22 名中 4 名（18.2%）が、1 種類以上の業務において、（S）の評価を得た。この 4 名はすべて 2013 年合格者である。うち 1 名は評価した 10 種類すべての業務において（S）の評価を得た。
- ③ 一方外国人介護福祉士が苦手とする業務は、記録、緊急時対応、コミュニケーションである。最も苦手は「記録」で 36.4%（8/22）が、次いで「緊急時対応」で 22.7%（5/22）が「不足（3）」の評価を得た。コミュニケーションでは、63.6%（14/22）が（1）または（S）であり、のこり 36.4%（8/22）は「やや不足（2）」であった。

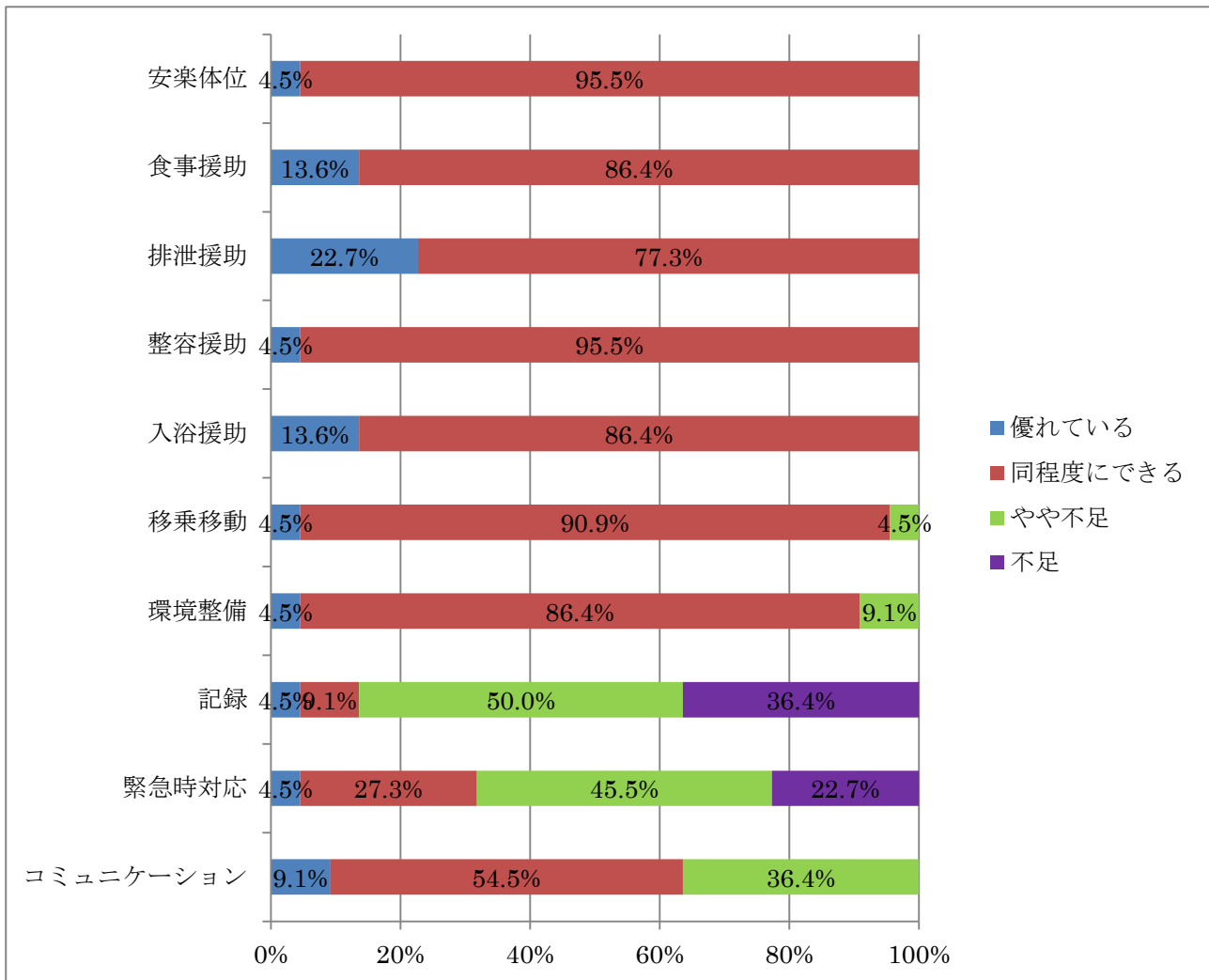


図1 外国人介護福祉士の業務成績

外国人介護福祉士の業務成績を外国人看護師と同時期に新人看護師として入職した新人日本人看護師に比較して優れている（1）、同程度にできる（2）、やや不足（3）、不足（4）の4段階で評価した。

2) 外国人介護福祉士の日本語能力について

(1) 外国人介護福祉士の日本語能力を評価してください。

外国人介護福祉士の日本語能力を「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」について、「満足している（1）」、「まずまずである（2）」、「やや不足（3）」、「大いに不足（4）」の4段階で評価した。

図2に示したように、外国人介護福祉士の日本語能力は、「読む」、「話す」及び「聞く」については全員が（1）または（2）の評価を得たが、「書く」については59.1%（13/22）が（3）の評価であった。

(2) 外国人介護福祉士の日本語能力で特に不足（問題）と感じていることは何ですか。

短い記録は大きな問題はないが、事故記録等長い文章や家族や関係機関等にみせる記録はまかせられない、記録の業務が出来ない。本人も消極的、漢字が難しい、書くことに時間がかかるなど。「書く」能力の不足が指摘されている。

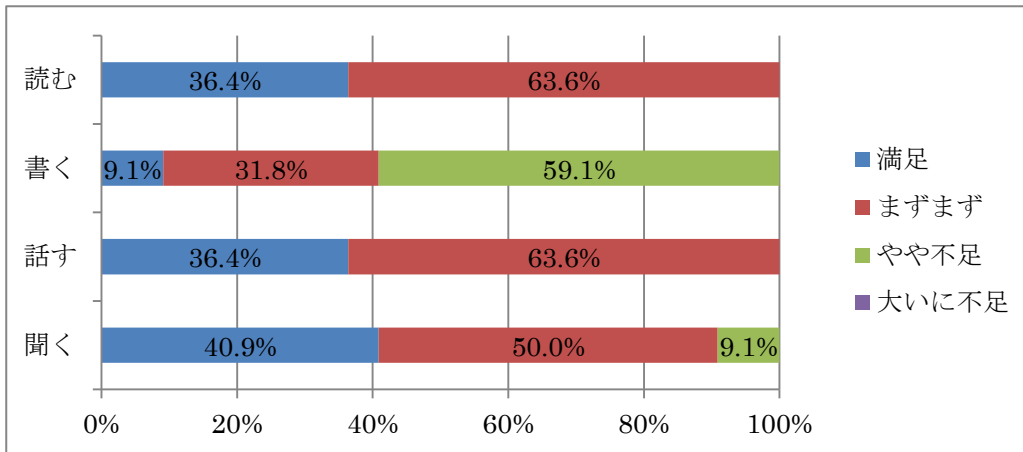


図2 外国人介護福祉士の日本語能力

外国人介護福祉士の日本語能力を外国人看護師と同時期に新人看護師として入職した日本人看護師に比較して優れている(1)、まずまずである(2)、やや不足(3)、大いに不足(4)の4段階で評価した。

(3) 日本語能力検定試験を受けたことがありますか。

日本語能力検定試験の受験経験があったのは10施設(12名)、受験経験なし2施設(3名)、記載なし4施設(5名)であった。つまり、66.7%(10/15)の施設、54.5%(12/22)の外国人介護福祉士が受験の経験をしている。成績はN2合格者が5名、N3合格者3名など。N1合格者はいなかった。

3) 外国人介護福祉士について

(1) 介護福祉士として日本人介護福祉士よりもすぐれていることは何ですか。

対応・仕事ぶりが丁寧である(5施設、6名)やさしい(2施設、2名)、高齢者に対する思いやりが深い(2施設、2名)、誠実である、まじめである、明るい。

優れていることはない(1施設)、記載なし(3施設)

(2) 日本人介護福祉士に比べて好ましくない(改善してほしい)こと

73%(11/15)の施設が、好ましくないことはないと回答した。

好ましくないこととして、おおざっぱである、記録・報告ができない、自己主張が強い(2施設)、研修生の特別感がぬけていないなど。

(3) リスク管理上の問題点

緊急時の対応に不安があるが1施設、リスクはないが10施設、記載なしが4施設であった。

4) 異文化(介護福祉士と利用者との持つ文化が互いに異なること)について

(1) 外国人介護福祉士の日本文化理解度

日本文化を理解しているとの回答が13施設、記載なしが2施設であった。

(2) 異文化が介護の質に影響を与えますか

良い影響があったが3施設、影響は与えないと思うが8施設、わからないが1施設、記載なしが3施設であった。

5) どのような支援があればよいとお考えですか。

(自由記述、原文のとおり)

- ・受け入れ当初は補助金も決定しておらず、テキストも揃っていなかったが、現在は徐々に整備されてきている。インドネシア語と日本語が併記されたテキスト等があれば自己学習に便利だと思います。
- ・受け入れ当初の日本語教育の方法についてはたいへん悩みました。専門家科目については教えることは出来るが、日本語を教えたことが無いために、とりあえず教科書を読むことを中心に行った。最終的に国家試験に合格するには、日本語問題を読んで理解できれば、マークシートにマーキングすればよい訳で日本語を書く解答はもとめられていない。その結果、現在も日本語を書くことは、ちょっと苦手かもしれません。やはり、日本語教育は日本語のプロ（日本語教師）に教えていただきたいと思うのですが、岐阜県の田舎では、日本語教師を探すのは大変であり、探す方法もわかりません。教師斡旋などの仕組みがあればありがたいです。
- ・専門家による国家試験学習・日本語学習。職員による学習では専門的に教えることができない。
- ・同士の交流会を開いてあげて欲しい。
- ・合格し、働いている人達との交流会を開いて欲しい。
- ・多方面からの支援ではなく、統一され、どの施設・地域へ行っても同じ支援がうけられる
- ・書くことの練習が必要だと思う。
- ・資格取得後も専門職としてのフォローアップ研修を継続していく必要があると思う。
- ・職場の日本人の中にうまくとけこんでおり、今のところ問題はありません。
- ・特になし（2施設）
- ・記載なし（4施設）

Ⅲ 調査総評

1 本調査は、「外国人介護福祉士の育成と定着に関する課題を見出すこと」を目的として実施しているが、回収率が19.0%と低率であった。より正確な情報を得るためには、調査に参加していただく施設数を増やさねばならない。質問の多くが記述式であることなど検討すべき課題と考える。

今回ご回答いただいた施設には来年度以降も調査にご参加いただき、経年変化を追跡させていただきますようお願いいたします。

電話での対応であったが、外国人看護師に関して何の問題もないとの理由で調査に応じる必要がないとのご意見の施設もあった。調査の意義を理解していただく努力が必要である。

2 国家試験合格後の状況について

外国人介護福祉士の評価は概ね大変高く、嬉しいかぎりである。

1) 外国人介護福祉士の業務成績

評価は外国人介護福祉士と同期入職の日本人と比較したもので、各施設の主観的判断によるものであり、すべての施設に共通した判断尺度によって客観的に評価したものではない。したがって、本調査の結果に対する信頼度は限定的であるが、本調査によれば外国人介護福祉士の業務成績はすばらしい。10種類中6種類の業務で日本人と「同等」または「優れている」の成績を得ている。「記録」、「緊急時対応」、「コミュニケーション」の成績がやや悪いのは日本語能力が不足しているためと推定される。勤務年数を重ねるにしたがい、日本語能力が向上することが期待されるので、今後が楽しみである。

2) 外国人介護福祉士の日本語能力

「書く」能力が不足と判定されている。看護師の調査でも同様の結果が得られている。日常の仕事を通じて、「読む」、「話す」、「聞く」は向上していくが、「書く」能力については、特別に学習しなければ習得できないので、外国人介護福祉士に学習を促す必要がある。

3) 外国人介護福祉士について（優れていること、好ましくないこと、リスク管理上の問題点）

外国人看護師は仕事ぶりが丁寧である、高齢者に思いやりがあるなど大変評判がよい。多くの施設（73%）が、記録を除き好ましくない点はないと答えている。また、緊急時の対応を除けば、リスクはないと考えているようだ。

4) 異文化と介護の質

外国人看護師の持つ文化（日本人にとって異文化）が良い影響を与えていると回答した施設があった（3施設、20%）ことは注目に値する。

5) その他

地方では日本語講師を簡単にみつけられないとの悩みが報告された。本調査では53%（8施設）の施設において、施設職員のみが日本語教育を担当している。日本語講師は都市部に集中しており、地方に少ないことは事実である。また市中より離れた施設も多いことから、skype を利用した指導などを広げる必要があるのではないかと考える。当法人でも試行予定である。